

ガンビアの春

庄野潤三



ガンビアの春

庄野潤三



河出書房新社

ガンビアの春

©1980

昭和五十五年四月十九日 印刷

昭和五十五年四月三十日 発行

定価は帯・函に表示してあります

著 者 庄野潤三

装幀者 野川羊三

発行者 清水 勝

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二丁目三十一番

電話東京四〇四一八二〇一（営業）
四〇四一八六一一（編集）

振替東京〇一〇八〇二番

印刷 三松堂印刷

製本 小高製本

ガンビアの春

今年の春、私はケニオン・カレッジのジョーダン学長の招きを受け、妻を伴ってオハイオ州ガ
ンビアを訪ねた。

私たちがこの丘陵の上で親しい隣人と往き来しながら日を過した時からちょうど二十年にな
る。水仙の花は咲いていたが、木々はやっと芽吹き始めたばかり、時折、雨が落ちて来るうすら
寒い日の間へ拾い物のような陽の光の降りそそぐ日が挟まるといった具合で、四月も下旬に入っ
たこの時期にしては幾分不順な天候であった。

ただ、いちばん最後のオナーズ・デー（その日の式に私は招かれたのだが）がこれ以上望めな
いほどのいい日和に恵まれたのだから、私たちの天気運はまず上乘といってもいいだろう。もう
一つそれを証明するものがある。今度の訪問に際してカレッジの主人役として奥さんの邦子さん
とともに一切の面倒をみてくれた古典科の助教授のクリフォード・ウェバーさんから届いた六月
四日附の手紙によると、私たちが出発したその翌日から五月二十八日の卒業式までの一カ月間、
雨でなければ一日中雲に閉された寒い日が続いたそうだ。

天気の良い日にはよく戸外で授業をする。ところが、この五月には一日もそんな日が無かつ

た。家へ掃除をしに来る婦人はいつもユティカ村の様子を話してくれるが、穀物の植附が少なくとも二週間は遅れているという。畑が水浸しになっているので仕事にならない。既にいくらか植附を済ました人もいるが、土の中で種が腐らないかと気を揉んでいる。

だが、天候によって左右されるのは農家の人だけではない。いつ終るとも知れないこの陰鬱な日々はガンビアのわれわれにも著しい影響を与え始めている。たまに雲間から太陽が顔を見せてくれる日があると、みんな目立って快活に楽天的になるが、曇ればたちまち逆戻り。よくよく話題にこと欠く場合は別として、手紙にせよ電話にせよ天気について触れるのは禁物となっている。今年のガンビアでは天候は経済状態よりもっと深刻に人々に影響を及ぼしているといっても決して大袈裟ではないだろう。以上のような消息を伝えてくれた。

「この冬が来る日も来る日も大雪をわれわれにもたらしたのとちょうど同じように、今年の春は小止みない雨と正常以下の気温をもたらしました」

ラテン語を教えている若いウエバーさんは、同時にヴァイオリンの弾き手でもある。以前、物理のフランクリン・ミラー教授の家で演奏を楽しんでいた弦楽四重奏団の一員であった。その編成はヴィオラがミラーさん、チェロがミラー夫人、第二ヴァイオリンが古典科の主任教授のマッコラさん、第一ヴァイオリンがウエバーさんとなっていた。残念なことにミラー夫人が五年前に亡くなってから中止になったが、ただ一人の聴衆であった邦子さんは次のように回想している。

「グラランドピアノのあるお部屋で週に一度集まるのが常でした。時々、音が外れても、時々、一人が迷子になっても誰も気にせず、まるで何事もなかったように一曲ずつ奏でて行った音楽好き

の集まり。終るとシェリーやワインのグラスを片手に雑談が始まります。本当に和やかな会合でした」

雨ふり続きの五月は、ウェバーさんに愛用のヴァイオリンを取り出す気持ちを起させないほどやり切れないものであったに違いない。

ガンビアに着いてから二日目か三日目にウェバーさんから“SHONOS' SCHEDULE”が届けられた。タイプ用紙二枚続きのものだが、これを見れば今日は自分は何時にどこで誰と会うんだというのはすぐに分る。簡潔でからっとした書き方の中に細やかさ、情味とともにノックス・カウンティらしい（そこにわがガンビア村がある）大らかさともいうべきものがある。例えば、

——午後十二時三十分 この日の残りをブランドンのマッキー氏の家族とともに過すためにガンビアを出発。

とあるのは、三日目の、昼近くから降り出した雨が夜まで続いた日曜日で、ブランドンは戸数二十五、人口二百の村。「この日の残りを」というのがいい。どうかごゆっくり、心ゆくまで水いらずでお過ごし下さい、あとは何も予定はありませんからというウェバーさんたちの心持が伝わって来るようだ。

——午後一時 マウント・バーノンで買物をするためクリフ・ウェバーとともにガンビアを出発。

というのもある。これは小雨の降る五日目の午後であった。もし出来れば、昔、親しい知人の車に乗せて貰って、あるいは大通りの角に根気よく立っていて、拾ってくれる車が来るのを待つ

て出かけたマウント・バーノンの懐しい店をちょっと覗いてみる時間があれば有難いといったところ、早速、取り入れてくれた。こんなふうに改まって予定表の中に書き込まれると、愉快な気分になる。邦子さんの名前が見えないのは、去年の九月から勤めるようになったコロンバスにある州の国際貿易事務所へ出る日であったから。

ガンビアから五マイル離れた、人口一万五千のこのマウント・バーノンで草分けともいふべき百貨店を経営しているキニー夫妻にも私たちは会うことになっている。私は旅行の日程が決まってからキニー宛に手紙を出した。その返事が来ないので、ひょっとするとまた彼の好きなメキシコへ出かけているのかも知れないと思ったりしていた。奥さんのリンダはメキシコ生れで、メキシコシティに実家がある。

アラムナイ・ハウスに着いた翌朝、管理人のベティさんが私たち宛の二通の手紙を渡してくれた。一通はジョーダン学長からクロムウエル・コテッジでのカクテル・パーティーの開始時刻が六時に変更になったという案内で、もう一通はキニーとリンダからであった。

「おめでとう！ あなたが名誉学位を受けるために、マウント・バーノン地区にあるケニオンへ戻って来るとは、何といういい知らせでしょう。われわれはマーティンスバーグ・ロードのポニイブルックにある私の父の家にいまは住んでいます。空いている時間があれば、是非とも夕食に来て頂きたい。都合のいい時に家の方へ電話をかけてくれませんか。393—1611。二人に会えるかと思うと胸が躍ります。間に挟まるこんなにも多くの年月のうちにあったこんなにも多い出来事をいちどきに取り上げるのは何と愉快でしょう。私の父は九十一歳になります。目は殆ど見えず、耳は殆ど聞えず、歩くことも殆どありません。しかし、あなたのお宅への幸福な訪問のこと

はいまでも覚えております」

その便箋には両肩のところは一八六九年に設立されたリングウォルト百貨店の、昔と今の二つのスケッチが入っていた。私は早速、キニーと電話で連絡をとり、うまい具合にそこだけ空いていた二日目の土曜日の夕方に会うことになった。

当日、手紙にあったボニイブルックの家で、六年前に出版されたキニーのお父さんの署名入りの著書“I FLEW A CAMEL”をキニーから贈られるが、それは第一次世界大戦当時、英空軍のソップピース・キャメルと呼ばれる戦闘機のパイロットとして、フランス戦線でドイツ空軍の撃墜王、「赤い男爵」リヒトホーフエンとその仲間たちとわたり合ったカーティス・キニー中尉の回想録であった。

私は日本へ帰ってからこの本を読み、飾り気のない言葉に惹きつけられるが、これまで知らなかったことが一遍に分った。キニーのお父さんは若くして死んだ父、ブロックウェイ・キニーのあとを追ってケニオン・カレッジに入学する。すなわち、父は一八七三年、彼は一九一〇年卒業のクラスである。ケニオンからマサチューセッツ工科大学に進む。第一次世界大戦が起ったのは、ニューヨークの建築会社に技師として勤めていた時であった。私たちが貨物船による世界一周の旅に出た老キニー夫妻と東京で会うのはそれから四十五年後である。

ここでジョーダン学長から出発までに受け取った手紙に触れておきたい。

今回のガンビアへの旅に関してまだ会ったことの無いジョーダン学長が一切の連絡に当たってくれたのは有難かった。私たちがいた時の学長のランドさんは柔和で愛想のいい方であったが、既

に亡くなっていた。ジョーダンさんはそれから二人目になる。ケニオンの学長に推されるまではコネチカット州のどこかの大学で歴史の教授をしていたとウエバーさんから聞いている。

ジョーダン学長の手紙は、長文の電報を含めると全部で五通になるが、どれも丁重で細やかな心遣いの溢れたものであった。

「私たちはあなたとあなたの奥様がケニオンとの友誼を新たにし、当地の古い友人に会うための訪問を心から歓迎します。ウエバーさんがあなたに話した通り、いまでは学校も大きくなり、男子だけでなく女子の学生もおりますが、あなたの方にとって馴染深いものはなお多く残しており、この地の精神と美は変わっていないことにお氣附きだろうと思います」

二度目に頂いた手紙には、そう書かれていた。また、オナーズ・デーの式に着用するガウンと帽子を前もって用意しておくために必要な私の身長、体重と頭の寸法を問い合わせる用件の手紙もあった。

出発前に届いた最後の手紙には、式当日の細かな段取りを知らせてあった。その中に、名誉学位を受ける候補者の一人一人にカレッジの正式な主人役が附くのがこれまでの習わしとなっていて、あなた方も御存知のウエバー教授夫妻がその任に当ること、二人はあなた方のおられる間、どんなことであれ喜んでお力になりますとあった。私はこの配慮に感謝した。殊にもともと会話が不自由であったところへ二十年の間にまるきり英語を忘れてしまつて心細がつていた妻にとつて邦子さんがそばに附いてくれるほど心丈夫なことは無かつたのである。

また、毎年、クリスマスにはオハイオの気温から家族の近況について詳しい便りを欠かしたことのなかつたブランドンのマッキーさんから来た手紙の写しを同封して、もしそちらで既に出来

上っている計画の支障にならなければ、ガンビア以外にいるこれらの旧友に会える時間を残しておいて頂ければ嬉しいと書いたところ、

「オナーズ・デー以前のわれわれの計画はまだ完全なものではありませんが、あなた方に寛いで頂き、当地の古い友人に会う自由な時間はたっぷり取っておくつもりです」

と私たちを安心させてくれる返事があった。

ここで年の若いウエバーさん夫妻と私たちがどういうふうにして知り合ったか、説明しておきたい。去年の五月のことだが、一年間の休暇を邦子さんの実家のある東京で過ごしながら、知人の教授がいる東京大学の西洋古典学の研究室へ通って、論文を書いていたウエバーさんが、詩人のランサムさんの奥さんからことづかった手紙とケニオン・カレッジ創立百五十年記念の卒業アルバム、「REVELLE 1975」、それに最新の入学案内を携えて、二人で多摩丘陵のひとつの丘にある私の家を訪ねてくれた。

ランサムさんは三年前に亡くなっていた。私たちはそれまでちっとも知らずにいたことを申し訳なく思った。ガンビアにいた一年間、ランサムさんは哲学の主任教授のオールドリッチさんとともに私たちの身元保証人を引受けて下さったのであった。私はウエバーさんから手渡された、いまは八十いくつになる筈の奥さんの手紙を読んだ。

親愛なる庄野さん

こんなに年月がたってからあなたのことでこんなにいい知らせが聞けるとは何と嬉しいことでしょう。ジョンと私は、あなた方がガンビアで過したあの愉快な一年とあなた方がここにお

られた間、私たちがお互いに往ったり来たりしたあの喜ばしい訪問のことを度々、思い出したものです。私はこのことをお書きになったあなたの本のお蔭でガンビアが日本で有名になったと聞いております。

あなたのお子さんは大きくなって今ではそれぞれ家族持ちになっていることでしょう。私は何度もお祖母さんになっていきますし、実際、二度も曾祖母さんになっています。

あなたとあなたの奥さんにくれぐれも宜しく申し上げる機会が得られたことを本当に嬉しく存じます。親しみ深い思い出をもって　ロブ・ランサム。

よい知らせとあるのは、ケニオンが近いうちに私をガンビアへ招待する計画をたてているという話を指していたのだが、私は気が附かずに読み過した。

ウエバーさんの話では、ランサムさんのお嬢さんがいまケニオンの本屋で働いていて、その方の家にランサム夫人と孫娘に当る方と三人で暮しているということであった。つまり、女ばかり三世代が一緒にいる。ランサム夫人は少し身体が弱っておられて、最近では殆ど外へ出ない。

それから「ケニオン・レビュー」の刊行が止められた時のこと。新しい学長が（ジョーダンさんの前の方である）帳簿を見て、こんなに金のかかるものはやめてしまえというので、中止が決まった。ランサムさんはその知らせを聞いた時、ひとこともいわれなかったそうである。財政上やむを得ない措置であったにせよ、せめて生みの親であるランサムさんがガンビアにおられる間は、打切りにはしてほしくなかった。

ウエバーさんはランサムさんを尊敬していたので、七年前にケニオンへ赴任してから、機会は

いつでもあったのにお宅を訪問しなかった。静かに暮しておられるランサムさんを煩わせたくなかったからである。亡くなられてみると、せめて一回だけでもお目にかかっておきたかったと悔んでいる。

「ケニオン・レビュー」は、英語科の若手の先生たちの熱心な努力で近い将来に復刊される見込みがある。今度の学長のジョーダンさんはこれを支持している。何といっても大きな費用のかかるものであり、基金のめどをつけるのが先決問題なので、その二人の先生は飛びまわっている。もし実現すればこんな嬉しいことはない。

まだその他に私たちは、最初は併設の女子のカレッジを作ったところ、そんな手ぬるいものでは承知しない彼女たちのいい分を入れて、結局、ほかの学校並に男女共学にせざるを得なくなつた事情についてウエバーさん夫妻から聞いた。部厚い“REVELLE”の頁を繰ってみると、あの丘の麓のグラウンドを女子の選手がラク羅斯の先に網の附いた棒を振りまわして駆けている写真が出ていたりして、何だが妙な氣持がした。年に二回のダンス・ウィークエンド以外には、全く女氣が無く（教授の奥さんは別として）、
「まるで僧院のようだ」

というのが、真面目で分別あるケニオンの学生の大方の歎きであつたのだが、こんなふうに若い娘で溢れるようになると、昔の卒業生はいったいどう思うだろう。

五百人を少し越える程度であつた学生がほぼ三倍近くになり、それにつれて教授の数も随分多くなつた。もっとも、その中に音楽の、そうして教会の聖歌隊の指揮者でもあつたシェワルツさん、フランス語のハーヴィーさん、物理のミラーさん、政治学のベイリーさん、数学のフィンク

バイナーさん、ドイツ語のヘイウッドさんなど十人近い馴染の先生がたがいまも健在である。大通りの散髪屋のジムはもうとくに引退したが、元気でいるらしい。親しいつき合いをしていた人の殆どはよその土地へ行ってしまう、もうガンビアには誰も知っている人はいなくなったという気持ちにいつの間にかなっていた私たちが、その考えは性急に過ぎるといわねばならない。

ウエバーさんも邦子さんも、学校町であると同時に草深いオハイオの田舎の村であるガンビアを好んでいた。ガンビアばかりでない。その周囲のいたるところに見出す、ノックス・カウンティ訛りを丸出しにしてしゃべる生え拔きの人たちに深い親しみを抱いている。そのため、既にカレッジの分譲する土地を手に入れ、近いうちに自分たちの家を建てて、この地に永住する決心をしている。その点でも私たちは話がよく合った。

もう一つ好都合であったのは、ケニオンへ来て間もなく、図書館にあった私の旧著「ガンビア滞在記」を邦子さんが読み、その内容を詳しくウエバーさんに話したので、二人とも私たちがどんなふうにガンビアの一年を送ったかを承知してしてくれたことだ。私の署名の入っているその「ガンビア滞在記」は、たまたまこれが中央公論社から刊行された昭和三十四年の春、奥さんと一緒に世界一周の旅の途中、東京へ立ち寄ったキニーのお父さんが、日本橋の丸善で八冊買って、その中から母校の図書館へ寄贈してくれた一冊であることもここに附け加えておきたい。

ウエバーさんは父方が純粹なドイツ系、母方は純粹なスコットランド系、ただし、どこかにオランダの血がほんの少し混っているという。これは邦子さんから得た知識である。きれいに晴れ渡った二日目の土曜日にウエバーさん夫妻は愛用のホンダの小型乗用車で私たちをアーミッシュの人たちの村へのドライブに連れ出してくれた。その時、ウォルナット・クリークの料理店デ

ル・ダッチマンでおいしい昼御飯を頂いたが、ウエバーさんは、この料理の味は祖母が作ってくれるものに似ているといった。それは父方のお祖母さんのことである。ドイツ人の両親のもとに生れたこの人は、ナイアガラ滝のあるバッファローから東四十マイルのデールという田舎町に育ち、いまはそこから更に二十マイルほど離れた丘の上の農場で聖書とともに始まりお祈りで終る、キリスト教徒らしい敬虔な毎日を送っている。今年、八十六歳になる。一生の殆どを同じ土地で過して来たこのお祖母さんは、邦子さんによると土地の主だといいたい風格を備えているそうだ。ドイツ語も上手で、たった一人の孫であるクリフをドイツ語でからかうのが好きである。

質朴を愛するウエバーさんには、このお祖母さんから受け継いだものが少なくないのかも知れない。私の妻は邦子さんが次のような話をしたのを覚えていっているという。

「クリフは古い物が好きで、どこか田舎道を車で走っている時など、前に見かけたい建物が取り壊されて新しいものに替っていると、とてもがっかりします。とにかく、いままであった物を変えるのを嫌がります。自分が使っている物はいよいよ使えなくなるまで——なかなかそうならないので困るんですが——捨てようとしません」

この性質は父方のドイツからのものか、それとも母方のスコットランドからのものか、どちらだろう。両方かも知れない。

ウエバーさんは、ある時、ラテン語の詩を作って、ケニオンの「ハイカ」という雑誌に投稿した。ところが学生がそれを返して寄越した。誰にも読めないから載せても意味がないというのが理由であった。それにしても勿体ないことをしたものだ。もしそのラテン語の詩が活字になったら、私はウエバーさんに頼んで朗読して貰うことが出来たかも知れないのに。

「庄野予定表」の四月二十一日、金曜日には、

——午前十二時三十分 アラムナイ・ハウスに宿泊。

となっている。私たちは二十年ぶりに戻って来たガンビアに真夜中のこんな時刻に着くとは思わなかった。寝静まったアラムナイ・ハウスの廊下を通り抜けたウエバーさん夫妻と私と妻が階段のすぐ横、ベティ・バロック夫人の名前が嵌め込まれた仕切り戸の手前まで来た時、腕時計の針は十二時を少しまわっていた。

ウエバーさんは両手にさげた私と妻のトランクを床におろすと、受附のカウンターにもなっている仕切り戸の上を見た。それから、邦子さんの方を振り向いて、

「メッセージが無い」

といったのだろうか。すぐに仕切り戸を開けて中へ入り、電話の載っている机の上を探したが、そこにも見当らない。

玄関に近い壁に掲示板がある。次の晩に私たちが聴きに行くことになるランサム記念講演会の、キーツの詩について話す女の人の写真の入ったプログラムが貼ってあった。その下にアラム